

久々野地域

果樹園

Kajuen

語り手 亀山 烈

聞き手 山本真紀

企画 高山市

取材日：令和5年1月18日

開墾から始まった果樹園

美濃加茂で次男坊として生まれ、高校を卒業するまでは、美濃加茂で暮らしていました。昭和32年、高校を卒業してすぐ単身で久々野の無数河に来ました。

僕の実家は、美濃加茂の果樹産地の山之上ってところで、果樹をやっとりました。太平洋戦争終戦後、昭和の開拓が始まってまして、それで僕も次男坊対策で久々野に来ました。親父には、子どもの頃からずっと久々野に来て果樹をやるんだぞって言われとりましたね。ここで果樹を始めたのは、ほとんどが次男坊対策の美濃の方の人達ばかりじゃなかったかな。僕も小さかったので記憶は定かじゃないけど、始めは9人ほどで入植されたそうです。ウンボとかブルドーザーが無いもんでね、ほとんど人の力で耕しましたね。うちの親父もたまにここに来てや、開墾したりして。僕がここに来る前の3年くらいは、実家の兄がここの土地を耕しとりましたね。

一人きりでここに来た時、果樹園の基盤はほとんど出来とりました。その頃は二十世紀梨が植えてありましたね。当時、全国的に梨を作っておったし、実家の果樹で梨を植えていたので、親父が梨を植えたんじゃないかと思えます。梨は、昭和26年頃から植え始めたらしいです。梨を植えて残ったところへは、桃を植えました。その当時は、梨と桃の2品目の経営をしておったね。果樹園の広さは、1.5ヘクタールほどだったかな。

まず、一人もんで暮らさなあかん。食事から全部準備して、畑の手入れをして、なかなか苦労した。やっぱりこの土地は石が多いもんでね。畑の石を片づける仕事はきつい仕事だったね。まあそれも春から夏までの仕事。秋になって収穫できると苦労を忘れたような気もします。

五六豪雪の後

そんな風に二十世紀梨をずっと作ってきたけど、昭和56年の豪雪で果樹園の梨の木、桃の木が雪の中にほとんど埋まり、一面スキー場かと思うような状態だったもんで、こりゃ駄目かなと思っておりました。そして、雪が融けたら梨の木はほとんど雪の重みで折れていた。梨はどうしても棚で作るもんで、上から雪で抑えられて全部折れたんだね。そんなことで、この五六豪雪を機に、ほとんどの梨の木は駄目になってしまいました。その後何を植えるかなってことで、林檎を始め、林檎と桃が果樹栽培の主体になったかな。

その頃から、桃は飛驒桃ということで市場でもかなり人気が出ました。やっぱり、昼と夜の温度差の関係で実の色づきはいいし、糖度も高い。そんな桃が採れたことで、中京市場でもかなり評判良くなり、それを境に飛驒桃のイメージがかなり良くなっていったね。で、それに伴って桃の栽培やって人が増えました。いろんところでみんなが開墾して、桃や林檎を作り始めたね。当時は、桃を一番多く作っていたかな。桃の主流は「昭和白桃」や



亀山 烈

昭和15年7月18日生

プロフィール

美濃加茂の山之上で次男として生まれる。

高校卒業後、次男対策として、

久々野の無数河で果樹園を始め、今に至る。

「白鳳」の2つの品種。林檎は「ふじ」「つがる」が多かったかな。

桃は収穫するまでに3年くらい。木の寿命は15年くらいやな。林檎は40年くらい寿命がありますが、収穫までに5、6年かかります。当時は林檎を始めでもね、やっぱり難しい。病気や害虫の対策。それに、味の良い物を作ろうとするとなかなかね。とにかく、林檎栽培は技術的に難しいね。ちょうどその頃、長野県の飯田の農家の方に頼んで林檎の剪定や夏の管理やら摘果やらの指導をしてもらいました。その後も継続して、講習してもらっています。そのおかげで、久々野の林檎栽培の技術がぐんと向上したよ。そのおかげで、飛驒の林檎の品評会では、久々野の林檎がたくさん入賞するようになったね。そうやって、久々野の林檎栽培技術はずいぶん発展したよ。

久々野果樹園の今

現在、果実の販売は、市場出荷と道の駅とか個人的な宅配ですね。みんな個人的な顧客も持っている。うちも5割くらいは個人的な宅配で販売するね。直接買いに見えるお客さんもいますけど、何十年も顔を見ずにただFAXだけでやりとりしているお客さんもいますよ。やっぱり、良い物を作らんとね。信頼のある物をね。良い物を作れば、お客さんは絶対に忘れんでね。美味しいものを作れば良いけど、不味い物に対しては本当に厳しいでね、お客さんは。

高冷地ということで、桃の樹は、かなり凍害を受けます。実が採れるようになる4年目くらいに凍害で、ぽこんと枯れてしまうこともあります。そこで凍害に対して強い苗を作ります。「ひだ国府紅しだれ」なんかを使って接ぎ木をして、少しでも凍害に強い樹を作るように工夫していますね。標高が高い分だけ、春先の霜の被害もあります。

林檎も今は、いろんな甘い品種が出てきています。たまには「紅玉」を好む人もいますが。「つがる」も美味しいで良いけど、ちょっと持ちが悪い。1週間くらい経つとやっぱりばけてきて柔らかくなるから、早く売らないといかん。他にも長男がいろいろな品種を植えていますけど、どこまでお客さんに認めてもらえるかな。林檎は主に「つがる姫」に始まって、「昂林」「シナノスイート」「秋映」「陽光」「名月」「ふじ」等と順番に実っていきますね。直売でいつお客さんが来ても、林檎がありますよっていう状態にしています。うちの果樹園では、さくらんぼから始めて、梨、桃、林檎が順番に実ります。せっかくお客さんに来てもらった時に、時期時期の果実があるようにしていますね。前は林檎の木のオーナー制とか林檎狩りなんかもやっていましたが、今は人手が足りなくてやっていません。

出荷は昭和40年くらいから60年頃が盛んだったかな。その頃はほとんど農協への出荷だったね。組合全体で、2億円くらい出荷した年もあります。そのうち宅配業者が盛んになってからは、みんなそれぞれ顧客を持って宅配に出すようになったね。だんだん宅配とか道の駅とか直接販売が増えてきたね。だから市場には昔ほどは飛驒桃は出回ってないね。コロナになってから余計に取り寄せが多くなって来ているかな。



飛驒林檎



飛驒桃

そして、これから

果樹の仕事は、48歳の長男を中心に主に僕と家内の3人でやっています。直売所での販売や配送、林檎ジュースや桃ジュースなどの加工品の販売などは、長男がやってくれとります。今、うちは長男が中心になってやってくれておるけど、孫は女の子2人やし、都会にいておるし。本人に真剣に継ぎたいって気持ちがあればいいですけど、親もきついことは言えんでね。

昭和46年に久々野に出荷組合ができた頃、組合員は55軒。一番多い時は70軒ほどの組合員がいましたが、今は半分以下になってしまったな。確か、今、果樹の組合員は20軒くらい。久々野の果樹園は、昔より減ってきてるね。辞められるところもあるし。ちょこちょこしたところは、みんな辞められたんじゃないかな。辞められる理由は、やっぱり高齢化と後継者がいないことかな。この舟山団地は6軒が果樹をやっとるけど、そのうちの5軒は若い後継者がおる。

今のところ、農業大学校を出た若い女の子が、新規でなかなか熱心に果樹をやってみえる。確か中津川市の方の人だったかな。元々果樹園だった所を借りて、ひとりで桃と林檎をやってみえる。なかなか良い物を採ってみえるよ。やっぱり、新しく入ってみえる人は助けてやらんとね。その女の子にも、組合のみんなでアドバイスしとるな。この子のように後継者がおらずに、放棄された果樹の跡を継いでくれると嬉しいね。でも難しいかな、今の時代では。果樹が好きなら良いけど。野菜やなんかは、移住者が来てみえるけど、果樹はなかなかないね。今のところ、その子の他に新しく久々野に来て、果樹を始めた人の話は聞かんね。

どこの家庭も後継者だけは、育ててほしいと思いますね。やっぱり後継者がおらんと心配なことがあるもんやでね。この舟山団地も今のところは大丈夫だけど、この後も後継者が続いていけば、嬉しいかな。出来れば、小学校や中学校の頃から果樹に興味を持ってくれる子がいると良いね。そしてその中から果樹をやる人が出てきたらもっと良いね。



赤く実った林檎